



愛され続ける。  
それが「伝統」になる。



© 雲母唐長

# OUR FAVORITE CRAFTS

スウェーデンハウス  
スタンダード

銘品館

唐紙 [ 雲母唐長 ]

寛永元年（1624年）に京都で創業、日本唯一続く唐紙屋を継承する「雲母唐長」。

板木と呼ばれる木版に絵の具をのせ、手摺りによって写し取られる美しい文様の和紙は、平安時代から現代まで、手紙や詩歌を書く料紙として、襖や壁紙として、多くの人に愛され続けてきた、日本の美しい伝統文化です。

天災や戦禍をくぐり抜け、現代まで守り継がれてきた板木は600枚以上。人々の祈りがこもったその文様には、一つひとつに意味や物語が存在します。中にはシルクロードを通じてユーラシア大陸やイスラム圏から伝わったデザインが元となり、日本人が自分たちらしく変化させることで、「伝統」となった文様も少なくありません。

長い年月を経て生じた板木の欠けやゆがみも、時間の経過をも写し取る雲母唐長の唐紙ならではの醍醐味。デジタルでつなぎ合わせる寸分狂いのない美しさとは別の、「なんやわからんけど、落ち着くわ」と人々に感じさせる、自然の「ゆらぎ」がそこにはあります。自然が姿を変えて存在している。だから愛される——その存在感には、自然を崇拝してやまない、北欧のプロダクツと深く響き合うものがあります。

雲母唐長では数年前から、唐紙を和室の装飾だけではなくアート作品やファブリック、食器、家具など、多岐にわたる分野で展開中です。受け継いできたものをそのまま次代へと手渡すだけではなく、現代と向き合いながら、自分たちの伝統として継承していく。その姿に、次の400年を生き抜くであろう、「本物」の在り様を見る気がします。